

共通1次試験と第2次試験

ほとんどの大学において大なり小なり毎年調査研究が行われているテーマである。その調査研究内容も非常に広範囲にわたるが、主なものは共通1次試験と第2次試験の得点の分布状況に関するもの、共通1次試験と第2次試験の成績の相関及びこれらの試験の各教科・科目間の相関に関するもの、共通1次試験と第2次試験をどのように組み合わせて合格者を決定すればよいかということに関するもの、共通1次試験の自己採点に関するものであるが、その他個別の特徴あるテーマについての研究も多い。ここでは、これらに関する昭和58年度の各国立大学の調査研究の中からいくつかを紹介することにする。

各大学の受験者の共通1次試験の得点の分布がどのようなものであるか、また全国の共通1次試験の全受験者の得点分布との比較においてはどうか、またこれらが年度ごとにどのように変化してきているかといったようなことは受験者層を把握する一つの材料となるため、ほとんどの大学において関心が持たれ調査されている。また近年、社会においてよく言われているいわゆる「輪切り」現象があるのかどうかに焦点を合わせた調査研究も多い。このいわゆる「輪切り」現象に関しては、その大学の受験者の共通1次試験の得点の標準偏差を調べ、それらが年度ごとにどのように変化してきているかを調査研究している大学が多い。標準偏差は、その大学の受

験者の平均点からの1人1人の受験者の得点の離れ方の平均のようなものを表しているから、全国の受験者の標準偏差との比較において、その大学の受験者の標準偏差が小さくなっていくことは、その大学の受験者の得点が狭い範囲に固まってくることを示すが、このような傾向があることを指摘している大学がいくつかある。一方、毎年ほぼ安定した得点分布を持つ大学もいくつかある。また共通1次試験に傾斜配点を取り入れたことにより、その大学の受験者の得点分布がどのように変化したかを調べている大学や、昭和57年度と58年度の2回にわたり受験した者の共通1次試験成績の全受験者のなかでの相対的位置の変化を調べている大学もある。

第2次試験の得点分布についても年度ごとの変化を中心に分析が行われている。これらは出題の反省などにも利用されていて教科・科目別にくわしく求められている。

共通1次試験と第2次試験の総合得点や各教科・科目間の相関についても引き続き多くの大学で調査分析が行われている。これは例えば共通1次試験の数学の得点が高い者は、第2次試験の数学の得点も高いかどうかといった関係の調査であるが、共通1次試験や第2次試験における各教科・科目の実態の把握や受験者層の把握、また出題の際の参考資料として、入学者選抜方法改善のために役立てるものである。まず共通1次試験の各教科・科目間の相関について

は、多くの大学で調査分析が行われているが、例えば国語の得点と数学の得点の相関と言っても大学ごとに受験者層が異なるため、相関の状況も大学により多少異なっている。数学の得点と理科の得点、社会の得点と理科の得点の相関係数がやや高い大学がいくつかある。また社会と理科において選択した2科目ごとにその得点の相関係数を毎年調査している大学もある。最も多くの大学が調査分析を行っているのが、共通1次試験の数学の得点と第2次試験の数学の得点のように、二つの試験の対応する教科・科目の得点や総合得点間の相関である。各大学の受験者全体において共通1次試験の総合得点と第2次試験の総合得点の相関係数はどの大学も高い。二つの試験の対応する教科・科目間においては、英語の相関係数が多くの大学において高いようであり、また理科の相関係数の高い大学もある。国語の相関係数が比較的低いことを示す大学が多い。これらの相関係数の年度ごとの変化を調べている大学もある。学部ごとにあるいは受験者全体と合格者に分けたり、またはいわゆる現役と浪人に分けたりして、きめ細かく調べている大学もある。英語などは比較的安定した値を示す大学が多いが、例えば数学など年によってあるいは学部によってかなり変化することを示す大学もある。

共通1次試験と第2次試験をどのように組み合わせるかを決めるのがよいかということも昨年までと同様に多くの大学でさまざまな形で調査研究が積み重ねられている。現行の選抜方式を基準にとり、極端な場合として共通1次試験の成績だけで合否を判定すると現行方式の合格者の何%が入れかわるかという調査もいくつ

かの大学で行われている。その大学の現行の選抜方式に占める共通1次試験の成績の割合にも関係するため一概には言えないが、10%程度の入れかわりの大学もあれば30%程度の入れかわりのある大学もある。第2次試験の成績だけで合否判定を行う場合についても調べられている。共通1次試験と第2次試験のウェイトを変えてみたり、共通1次試験や第2次試験の中の教科のウェイトを変えて、合否または受験者の得点順位がどのように変動するかが調べられている。

共通1次試験の自己採点についての調査研究を行った大学がいくつかある。新入学生に対して継続して調査を行っている大学があるが、共通1次試験の得点と自己採点の得点の間の誤差については、高得点者は自己採点が過小評価になる傾向があり、低得点者は過大評価になる傾向があることを示している。また自己採点の誤差分布が調査され、かなりの人数の者が±20点以内であることを示している大学もある。新入学生アンケート調査を行い、自己採点結果による志望変更と現役・浪人の関係及び自己採点結果の満足度と志望変更の関係等を調査している大学もある。

大学入試センターでは共通1次試験の本試験と追試験を同一人に受けさせるモニター調査を行い、得点の分散の大きい教科では相関係数が大きいこと等が示されたり二つの試験の難易差の推定の研究等が行われている。また共通1次試験の選択科目間の難易差と受験者群の学力差の解析に関する研究等も行われている。更に共通1次試験の国語、数学I、英語Bを用いての学力レベル識別をねらった尺度を構成する試みも行われたり、第2次募集を行った大学につい

てその入学者の共通 1 次試験の成績分布の対比も行われている。

昭和60年度の国公立大学の第 2 次試験の教科・科目をもとに、試験教科・科目の類型と学

部等の特性との関係の調査研究も行われている。

また、毎年入学試験問題を高等学校教員に送付し、意見を求めて改善に努めている大学もある。